

とねり 自然 図鑑



平成28年度

協力：舎人地域学習センター
フォトクラブメビウス

もくじ

タンチョウ	P3～P4
サバクヒタキ	P5～P6
メジロ	P7～P8
シジュウカラ	P9～P10
ユリカモメ	P11～P12
シラサギ	P13～P14
カルガモ	P15～P16
スズメ	P17～P18
ハシビロコウ	P19～P20
フラミンゴ	P21～P22
ハクセキレイ	P23～P24
オオヨシキリ	P25～P26



とねり自然図鑑

世界中にいる動物、昆虫や花などいろいろな自然の写真を「フォトクラブメビウス」の会員方にご協力いただき、毎月発行しております。写真にちなんだ「へえ～」という情報もお楽しみに。

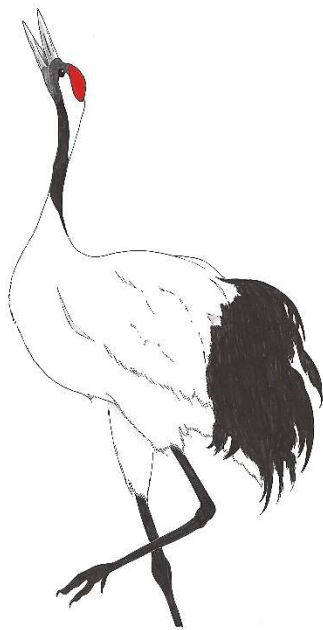
【撮影した方のつぶやき】タンチョウ鶴の母鳥が、降り積もった雪の下からエサを探し求めて我が子に与えている姿に感動し、思わず胸が熱くなりました。

【タンチョウの戸籍簿？】

○タンチョウは国の特別天然記念物であり、国際的に絶滅危惧種に指定されています。日本では北海道東部で見られますが、第二次世界大戦後の一九五三年には三十三羽にまで減少し、絶滅寸前となっていました。しかし、冬季間の給餌などの保護策が上手くいき、繁殖に成功しました。

野生のタンチョウとは別に、世界中の動物園や繁殖センターでは千二百羽前後が飼育されています。飼育下の個体群を維持することは、野生のタンチョウが遺伝的多様性を失ったり、伝染病などの危険にさらされた時に野生個体群を補完するためです。しかし、飼育下では

名称：タンチョウ
学名： *Grus japonensis*
体長：約150cm
体重：約6~12kg
分布：東アジア、日本
場所：湿原



しっかりと管理のもとに繁殖させないと、近親交配に陥りやすく、野生以上に遺伝的多様性が失われやすくなるそうです。そこで一九七二年にタンチョウの戸籍簿が作られることになり、多摩動物公園の担当で国際血統登録が開始されました。世界中で飼育されているタンチョウは多摩動物公園の野生生物保全センターのコンピュータに登録され、新しいペアをつくる時には遺伝的に遠い相手を探し出される仕組みになっています。こうして、世界中の皆が協力して絶滅から動物を守るため日々努力しているのです。

「舎人図書館にある参考資料の一部を紹介」

- 小宮輝之 『新世界絶滅危機動物図鑑 鳥類 I』 学研教育出版
- 吉野俊幸 寒竹孝子 『鳥の自由研究 町のまわりで観察 秋冬』 アリス館
- 川上和人 『鳥 (ポプラディア大図鑑WONDA)』 ポプラ社

毎月集めて、舎人地域学習センター・図書館のオリジナル図鑑をつくろう！



とねり自然図鑑

世界中にいる動物、昆虫や花などいろいろな自然の写真を「フォトクラブメビウス」の会員方にご協力いただき、毎月発行しております。写真にちなんだ「へえ～」という情報もお楽しみに。

【撮影した方のつぶやき】 中国大陸の砂漠に生息しており、非常に寒さに強い野鳥です。日本国内では滅多に見られません。数年前の1月に降雪直後の西新井橋河川敷にて撮影したものです。

【サバクヒタキは迷い子？】

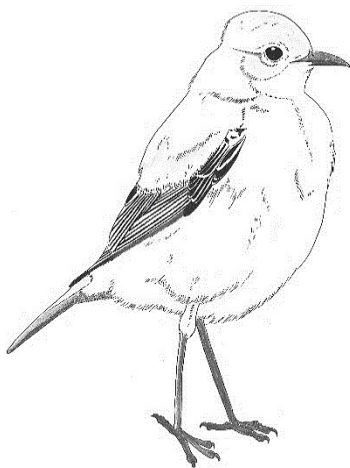
○サバクヒタキは迷鳥とされています。では、迷鳥とは何なのでしょう？それは鳥の渡りの種類です。鳥の渡りとは、毎年決まった時期に群れを作って日本にやってくることです。そしてまた何カ月か経つといつせいに姿を消します。こうやって旅する鳥を渡り鳥と呼びます。鳥がなぜ渡りをするのか、ということは実のところ、まだあまりよくわかっていないそうです。

渡り鳥は、いくつもの種類に分けられます。冬に食べ物が得にくい北国から、日本にやってきて冬を越す「冬鳥」。日本が春になり、昆虫などの食べ物が増えた頃、日本にやってきて繁殖する「夏鳥」。

名称：サバクヒタキ（砂漠鷓）
学名：Oenanthe deserti
体長：約14cm
体重：約19g
分布：アフリカ、アラビア半島
場所：砂漠、荒地、海岸
(日本では草原、川原、農耕地)

北国で繁殖し南国で冬を越し、その途中で日本に立ち寄る「旅鳥」。渡りをせず1年中日本にいる「留鳥」。留鳥の中でも季節によって日本国内を移動する「漂鳥」。そして、台風の風に流されるなどして、本来の渡りコースから外れてしまい、迷いこんで来るのが「迷鳥」なのです。サバクヒタキは渡りの途中に群れからはぐれて日本に来ることがある鳥ということなのです。

これを知ると、このサバクヒタキも仲間とはぐれてしまい寂しい気持ちでいるように見えてきます。また仲間のもとに戻れると良いですね。



↓ 舎人図書館にある参考資料の一部を紹介 ↓

富士鷹なすび 『原色非実用 野鳥おもしろ図鑑』 日本野鳥の会

叶内拓哉 『山溪ハンディ図鑑7 日本の野鳥』 山と溪谷社

小宮輝之 『ニューワイド学研の図鑑 鳥』 学研教育出版

毎月集めて、舎人地域学習センター・図書館のオリジナル図鑑をつくろう！



とねり自然図鑑

世界中にいる動物、昆虫や花などいろいろな自然の写真を「フォトクラブメビウス」の会員方にご協力いただき、毎月発行しております。写真にちなんだ「へえ～」という情報もお楽しみに。

【撮影した方のつぶやき】鮮やかなピンク色に咲く桜の枝にちゃんと止まるメジロはとても愛くるしく、まさに春を告げる鳥。素敵な写真を撮ることができました。

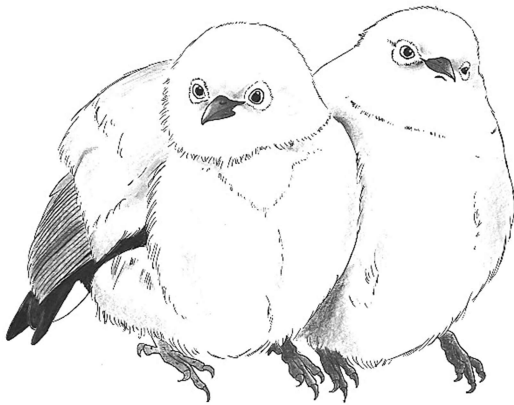
【春を告げる鳥】

名称：メジロ（目白）
学名：Zosterops japonicus
体長：約12cm
体重：約9～12g
分布：日本全土
主食：花蜜、小さな昆虫

○メジロは日本人にとって最も身近な野鳥のひとつです。鳴き声は「チーチュルチーチュルチルチルチルチルチー」など高い声で早口にさえずります。色彩も特徴的で、他の鳥とは見間違えることがないといわれています。一番の特徴は目のまわりが白いことです。名前の由来もそこから目白（メジロ）という名がつけましたが、花の蜜が好きことから「はなすい」「はなつゆ」などの方言名もあり、メジロの舌先は花の蜜を吸いやすいように筆状になっています。

また、メジロは番になると二羽寄りそって行動する野鳥で、花の蜜を吸いに来ても決して二羽が離れることはないそうです。寄り添うのは番だけでなく、群れで一本の枝にお互いを押しあうようにしてぴったりと並ぶ習性もあります。このことから、混み合っていることや、物事が多くあることを意味する「目白押し」という言葉が生まれたといわれています。

メジロはウグイスと並び、春を告げる鳥として昔から親しまれています。梅の咲くころ、高い声のさえずりが聞こえてきたら、ぜひ辺りを見渡してみてくださいね。



「舎人図書館にある参考資料の一部を紹介↓

「ピッキオ 『改訂版 鳥のおもしろ私生活』 主婦と生活社

「大橋弘一+Naturally 『鳥の名前』 東京書籍

「戸塚学 箕輪義隆 『身近な野鳥観察ガイド』 文一総合出版

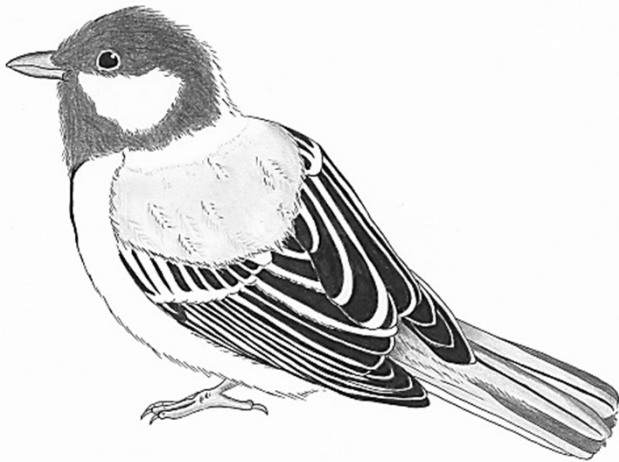
毎月集めて、舎人地域学習センター・図書館のオリジナル図鑑をつくろう！



とねり自然図鑑

動物、昆虫や花などいろいろな自然の写真を「フォトクラブメビウス」の会員方にご協力いただき、毎月発行しております。写真にちなんだ「へえ～」という情報もお楽しみに。

【撮影した軽部さんのつばやき】天気の良い青空の中、桜の木の枝に止まったシジュウカラを見つめ、眺めているだけでとっても春らしい光景に感じました。



名称：シジュウカラ（四十雀）
 学名：*Parus minor*
 体長：約14.5cm(翼開長時は約22cm)
 体重：11-20g
 分布：日本、韓国、東アジア、ロシア
 主食：果実、種子、昆虫
 天敵：カラス、ヘビ

【小さい体で実は大食い】

○スズメほどの小さな体のシジュウカラですが、実は1羽が1年間で食べるシャクトリムシの数はおよそ12万5,000匹にもなります。もちろん他の虫や、果実、種子なども食べます。

たくさん虫を食べてくれるところから、シジュウカラがいてくれると手間がかからず庭造り出来るといわれています。

シジュウカラのエサとなる虫がいるということは、そこが豊かな環境であることの目安と考えられ、そのことから「町の緑地バランスが良いかどうか」のバロメーターとされる小鳥です。

【何十通りもある地鳴き】

○鳥の『地鳴き』とは、『さえずり』以外の鳴き声のことをいいます。『さえずり』は基本的に繁殖期にしか出すことがありませんが、『地鳴き』は1年中出されます。では、何のために2種類の鳴き声に分かれているのかというと、『さえずり』はメスを呼ぶときや自分の縄張りだと主張するときに出します。対して『地鳴き』は、個体の居場所の確認、警戒、威嚇などとして使われています。単調的な『さえずり』に対し『地鳴き』は様々な組み合わせを持ち、他の個体に向けてのシグナル的な役割を果たしています。シジュウカラはそうしてコミュニケーションを取っているのです。

「舎人図書館にある参考資料の一部を紹介↓

「上田恵介 『世界のかわいい小鳥』 パイインターナショナル

「叶内拓哉 『山溪ハンディ図鑑7 日本の野鳥』 山と溪谷社

「海老原美夫、鈴木茂也、志村英雄、松田道生 『探鳥地図館 首都圏』 小学館

毎月集めて、舎人地域学習センター・図書館のオリジナル図鑑をつくろう！

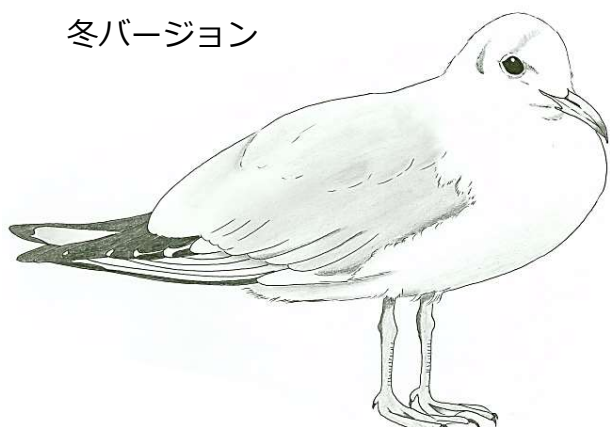


とねり自然図鑑

動物、昆虫や花などいろいろな自然の写真を「フォトクラブメビウス」の会員方にご協力いただき、毎月発行しております。写真にちなんだ「へえ～」という情報もお楽しみに。

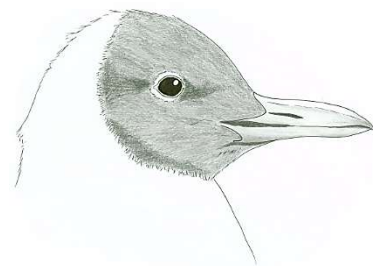
【撮影した竹内さんのつづやき】ユリカモメがゆっくりと水面に着水する瞬間を撮影することができました。着水した瞬間の波紋とユリカモメの姿勢がとてもキレイに撮れました。

冬バージョン



名称：ユリカモメ（百合鷗、都鳥）
 学名：Larus ridibundus
 体長：約40cm（翼開帳時は約93cm）
 分布：日本全土
 主食：小魚
 天敵：ハヤブサなど猛禽類

夏バージョン



【伊勢物語】

○ユリカモメは別名、都鳥（みやこどり）とも呼ばれます。古典の知識のある方でしたら「ユリカモメの事だろう」と思うでしょう。

なぜなら、伊勢物語では「都鳥」のことを「白き鳥の嘴と脚と赤き、嶋（しぎ）の大ききなる、水の上に遊びつつ魚を食ふ」と説明していて、大きさや体の特徴、水面を泳ぎながら魚を食べている事などから、この鳥はユリカモメと推定されています。ちなみに、「都鳥=都の鳥」ということから、ユリカモメが1965年に東京都の鳥に指定されています。

名にし負はば いざ事問はむ 都鳥
わが想う人は 在りやなしやと
 （在原業平 伊勢物語 第九段）

この言葉の意味は「都という名を背に負っているならば、いざ質問しよう都鳥。私が想う人はそこに健在でいるのかどうか」と。ところが、江戸時代より前の「都鳥」は、特徴からカモメ科のユリカモメを指している事もあれば、ミヤコドリ科のミヤコドリを指しているものもあり、どちらなのか判らない場合の方が多いのです。

船競ふ 堀江の川の 水際に

来居つつ鳴くは 都鳥かも

（大伴家持 万葉集 卷二十 四四六二）
 「たくさんの船が競うように行き交う、堀江川の水際にやってきて鳴いているのは、みやこどりなのでしょうか」、これは万葉集の一文ですが、ここで指す都鳥もカモメ科のユリカモメなのかミヤコドリ科のミヤコドリなのかは定かではありません。

「舎人図書館にある参考資料の一部を紹介↓

- ！ 真木広造 『名前がわかる野鳥大図鑑』 永岡書店
- ！ 吉野俊幸 『ヤマケイポケットガイド6 野鳥』 山と溪谷社
- ！ 吉田巧 岩下緑 『鳴き声と羽根でわかる野鳥図鑑』 池田書店

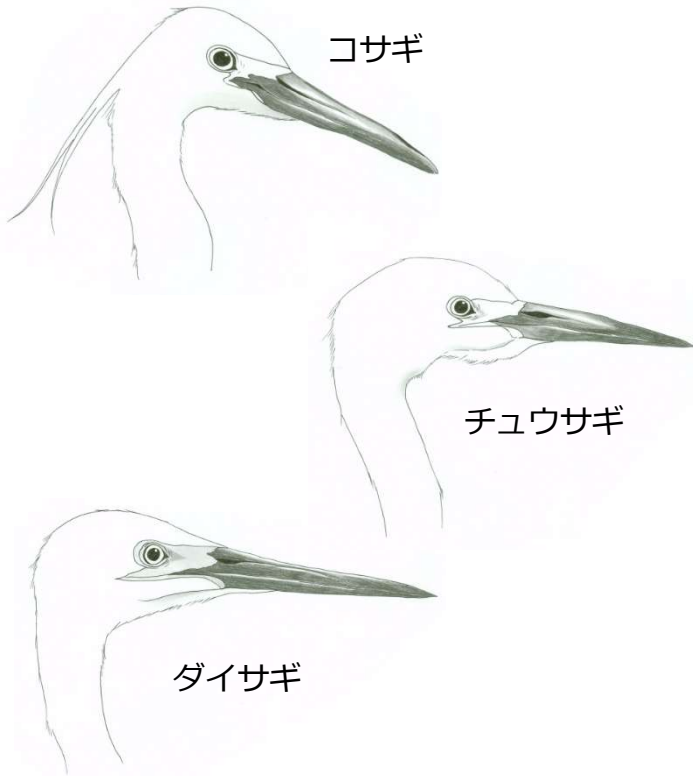
毎月集めて、舎人地域学習センター・図書館のオリジナル図鑑をつくろう！



とねり自然図鑑

動物、昆虫や花などいろいろな自然の写真を「フォトクラブメビウス」の会員方にご協力いただき、毎月発行しております。写真にちなんだ「へえ～」という情報もお楽しみに。

【撮影した岡田さんのつばやき】真っ白でとても美しい佇まいでした。もう一羽はちょうど水面に着水するところ。一枚の写真に静と動が混在するととても良い写真が撮れました。



名称：シラサギ（白鷺）
学名：Egretta garzetta
体長：約46-90cm
分布：日本全土
主食：爬虫類、魚類
天敵：オオタカ

シラサギの種類は、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、カラシラサギの4種類がいます。まず、ダイサギはもっとも大きなシラサギで体長約85～100cmもあり、またもっとも多く生息しているシラサギです。次に、チュウサギは体長約68～70cm、見た目はダイサギとよく似ていますが、体が小さいことや、くちばしが短いことなどで識別します。コサギは体長約60cm、チュウサギよりさらに小さいですが、長いくちばし、黒い足、黄色い指をしています。そして、カラシラサギは体長約60～68cm、目もとは黄色、足は黒褐色、指は黄緑色をしています。

シラサギはこの4種とも羽根がとても綺麗で、かつては飾り物として高価に売買されてきました。このためシラサギは乱獲され、世界のあちこちで絶滅に近い状態となりましたが、その後、捕獲を多くの国で禁じられ、シラサギは絶滅せずに済み、再び身近に見られるようになりました。人と動物の共存の道を改めて考えていかなければなりませんね。

【シラサギは存在しない？】

○実はシラサギというのは白いサギの総称なのです。では、シラサギとは一体何でしょうか？

シラサギとは白いサギのことで、コウノトリ目サギ科シラサギ類というグループで構成されています。食事は単独ですが、夜に寝るときは群れて寝ます。また、他の種類のサギたちと一緒にコロニー（サギ山）を作って繁殖したりもします。

「舎人図書館にある参考資料の一部を紹介↓

- 「小宮輝之 戸塚学 『里山の野鳥ハンドブック』 NHK出版
- 「大橋弘 『鳥の名前』 東京書籍
- 「川上和人 『ポプラディア大図鑑WONDA 鳥』 ポプラ社

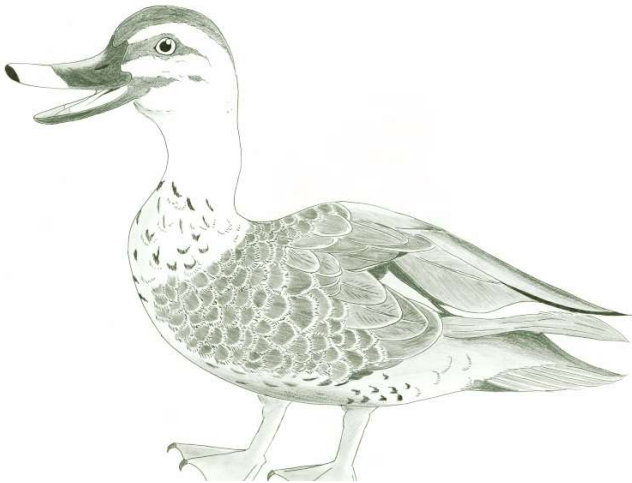
毎月集めて、舎人地域学習センター・図書館のオリジナル図鑑をつくらう！



とねり自然図鑑

動物、昆虫や花などいろいろな自然の写真を「フォトクラブメビウス」の会員方にご協力いただき、毎月発行しております。写真にちなんだ「へえ～」という情報もお楽しみに。

【撮影したさん軽部さんのつぶやき】水辺に浮かぶ、カルガモの親子。かわいらしい子ガモを見つめる母ガモの姿を写真に収めました。



名称：カルガモ（軽鴨）
 学名：Anas zonorhyncha
 体長：約53-63cm
 分布：日本全土
 主食：草の実、水草類、水生昆虫、貝類
 天敵：カラス、イタチ、タカ、キツネ等

【カルガモの名の由来】

○軽鴨（カルガモ）という漢字名は日本名です。その語源は「軽という地名に由来する」という説があります。『万葉集』の天武天皇の皇女である紀皇女の歌に「軽の池のうらみ行き廻る鴨すらに玉藻のうへに独宿なくに」とあります。「軽の池」に藻が生えていることから、この歌の季節は夏と考えられるため、冬鳥のカモではなく、夏でも見られるカルガモのことのようです。

現在、カルガモと呼ばれているカモは、この池の「軽」とつけて軽鴨と呼ばれるようになったのではないかとされています。

江戸時代からはナツガモとしても知られていたそうです。

【お引越しするカルガモ】

○親ガモの後ろを数羽の子ガモが連なって歩くのは、カルガモのお馴染みの光景です。では、ヨチヨチと歩いていったいどこに向かっていくのでしょうか。

カルガモは、水辺から離れたところに卵を産みます。卵がかえってからは、エサや安全面から水辺、水上の方が環境に良いので歩けるようにまで成長した子ガモたちをゾロゾロと引き連れてお引越しを行います。他の鳥だと親鳥がエサを取ってきて、子に与えて巣で成長させますが、カルガモの親は子にエサを与えることはしません。そのため、子ガモが成鳥になる前から親子でそろってお引越しするのです。

「舎人図書館にある参考資料の一部を紹介↓

- 「樋口広芳 『日本の鳥の世界』 平凡社
- 「大田眞也 『田んぼは野鳥の楽園だ』 弦書房
- 「氏原巨雄 氏原道昭『日本のカモ識別図鑑』 誠文堂新光社

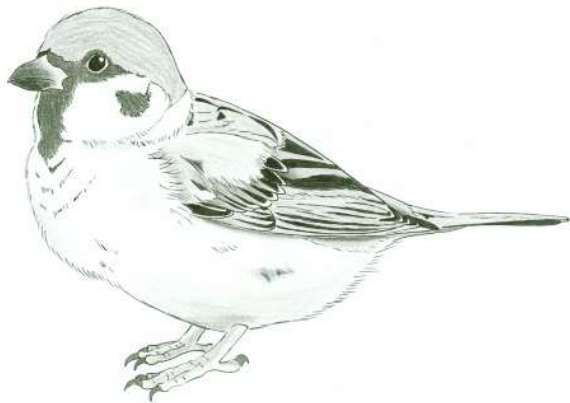
毎月集めて、舎人地域学習センター・図書館のオリジナル図鑑をつくろう！



とねり自然図鑑

動物、昆虫や花などいろいろな自然の写真を「フォトクラブメビウス」の会員方にご協力いただき、毎月発行しております。写真にちなんだ「へえ～」という情報もお楽しみに。

【撮影したさん竹内さんのつばやき】まっしろな頭をした鳥で、何の鳥かよくよく見てみるとスズメでした。アルビノのスズメは珍しく、すぐにシャッターを切りました。



名称：スズメ（雀）
 学名：*Passer montanus*
 体長：約14-15cm
 体重：約18-27g
 分布：日本全土（一部離島を除く）
 主食：種子、虫
 天敵：猫、カラス、小・中型の猛禽類

【アルビノとは？】

○【アルビノ】というのは、先天的に皮膚や髪全体のメラニン色素が無い、あるいは非常に少ない状態のことをいいます。また先天的に一部のメラニン色素が欠けているのは、

【白斑】といえます。そして、突然変異で体毛・羽毛・皮膚等が白化するのを【白変種】といえます。

この写真のスズメは【アルビノ】なのか【白斑】なのか【白変種】かは不明ですが、いずれにしてもこの頭部が白いスズメは珍しい個体です。

【スズメの巣づくり】

○ツバメの巣はよく見かけるけど、スズメの巣を見かけることはあまりないという方は多いのではないのでしょうか？

ツバメは人がよく通る場所に好んで巣をつくりませんが、スズメは人への警戒心が強いいため、巣を見る機会が少ないのです。

スズメの巣はお茶碗ぐらいの大きさで、10日間ほどで作りあげてしまいます。そこで産卵を行い、ヒナがかえってから巣立ちまでが14日間ほど、完全に自立するまではおおよそ50日間ほどかかります。繁殖の季節は幅広く、通常3～8月ごろです。

「舎人図書館にある参考資料の一部を紹介↓

- ！上田恵介 柚木修 『小学館の図鑑NEO 鳥』 小学館
- ！上田恵介 『世界のかわいい小鳥』 パイインターナショナル
- ！ピッキオ 『鳥のおもしろ私生活』 主婦と生活社

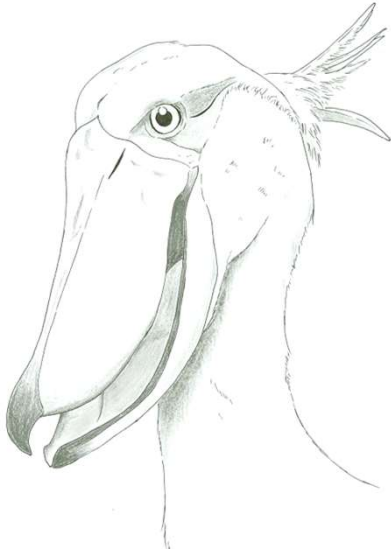
毎月集めて、舎人地域学習センター・図書館のオリジナル図鑑をつくろう！



とねり自然図鑑

動物、昆虫や花などいろいろな自然の写真を「フォトクラブメビウス」の会員方にご協力いただき、毎月発行しております。写真にちなんだ「へえ～」という情報もお楽しみに。

【撮影したさん竹内さんのつづやき】とても大きなクチバシを持ったハシビロコウ。微動だにしないので、写真がとても撮りやすい変な鳥でした。



名称：ハシビロコウ（嘴広鸛）
学名：*Balaeniceps rex*
体長：約100-140cm
体重：約4-7kg
分布：アフリカの湿地、草原地帯
主食：魚類

【謎の怪鳥】

○ハシビロコウの生息数ははっきりせず、1,000~2,000羽といわれたり、1万羽ほどともいわれる絶滅危惧種です。また、その生態についてもまだまだ謎だらけの鳥なのです。

ハシビロコウは動かない鳥としても知られています。これは、獲物を捕らえる時の習性で、水面近くに寄ってくる魚を何時間もじっと待ち続け、獲物を捕らえます。また、獲物を捕らえるときもクチバシで突くように捕えるのではなく、大きなクチバシを開けて体ごと倒れるようにして襲いかかり、魚を丸飲みにします。その魚を消化するのに数時間もかかり、消化作業に1日のエネルギーの30%も費やします。

【孤独が好き】

○ハシビロコウは基本的に単独行動で、他の個体が近寄るのを嫌がります。

そのため、檻の中に複数羽いてもお互いに離れて過ごします。1羽が移動すると、他のハシビロコウも移動し、一定の距離を保ちます。また、ハシビロコウは鳴くことはなく、クチバシを叩き合わせて音を出す『クラッタリング』により、威嚇したり、コミュニケーションを取ったりします。

！ 舎人図書館にある参考資料の一部を紹介 ↓

！ 上田恵介 柚木修 『小学館の図鑑NEO 鳥』 小学館

！ 鈴木まもる 『世界の鳥の巣本』 岩崎書店

！ 川上和人 『ポプラディア大図鑑WONDA 鳥』 ポプラ社

毎月集めて、舎人地域学習センター・図書館のオリジナル図鑑をつくろう！



とねり自然図鑑

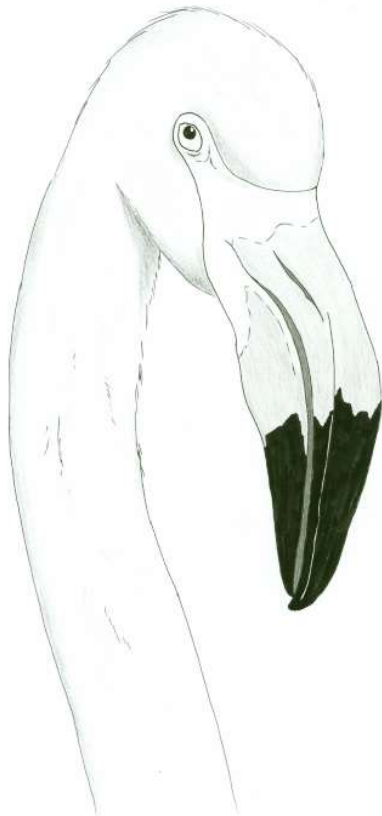
世界中にいる動物、昆虫や花などいろいろな自然の写真を「フォトクラブメビウス」の会員方にご協力いただき、毎月発行しております。写真にちなんだ「へえ～」という情報もお楽しみに。

【撮影した岡田さんのつぶやき】2羽仲良く水を飲んでいる姿は、動きもそろっていて、とてもきれいでした。フラミンゴの良い写真が撮れました。

「フラミンゴはなんでピンク色？」

名称：ベニイロフラミンゴ
学名：*Phoenicopterus ruber*
体長：約120-140cm
体重：約2.2~2.8kg
主食：プランクトン、エビ類、藻類など
天敵：ハイエナ、ジャッカル

タキ



○フラミンゴは熱帯や亜熱帯の浅い湖などに生息しています。気温の変化にとても強い鳥で、他の動物が住みにくいところでも生息できるといわれています。また、とても社交的な性格で、縄張り意識もあまり強くないので、大きな群れで生活を行います。多いときだと約百万羽に及ぶこともあります。

サンチン」「ベータカロチン」という色素によるものです。この色素を取らなければ体は白くなっていきます。また体のピンク色の鮮やかさが繁殖のペアを組むことにも関係するといわれ、フラミンゴにとっては必要な体の色のようです。

次に、片足立ちですが、大変そうなのは何のために片足立ちを頻繁に行うのか？それは、羽毛の生えていない足から体温を奪われないようにするためなのだそうです。どちらも生きていく上では必要なことだったんですね。改めて動物園などでフラミンゴを観察し

「舎人図書館にある参考資料の一部を紹介↓

「『死ぬまでに見たい！絶景の鳥』 エクスナレッジ

「上田恵介 柚木修 『小学館の図鑑NEO 鳥』 小学館

「川上和人 『ポプラディア大図鑑WONDA 鳥』 ポプラ社

毎月集めて、舎人地域学習センター・図書館のオリジナル図鑑をつくろう！



とねり自然図鑑

世界中にいる動物、昆虫や花などいろいろな自然の写真を「フォトクラブメビウス」の会員方にご協力いただき、毎月発行しております。写真にちなんだ「へえ～」という情報もお楽しみに。

【撮影した軽部さんのつぶやき】家の庭先をセキレイが尾を上下に揺らしながらよちよち歩いていました。少し寂しそうな背中が印象的な写真を撮ることができました。

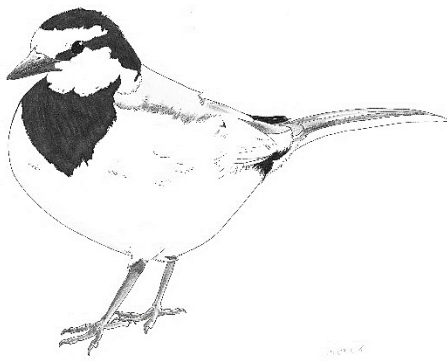
名称：ハクセキレイ（白鶺鴒）
学名：Motacilla alba lugens
体長：約21cm
体重：約30g
主食：昆虫類
天敵：ヘビ、イタチ、カラスなど

○日本の神話や古典などで多くの鳥が登場しますが、その中でも一番最初に登場するのがこの鶺鴒（セキレイ）なのです。「古事記」国造りの項では、伊邪那岐神（イザナギノカミ）と伊邪那美神（イザナミノカミ）が秋津州（日本列島）を作った時、最初に渡ってきたのがセキレイとされています。また「日本書記」では、子どもの作り方を知らなかったイザナギとイザナミに子作りをセキレイが教えたとされています。そのため、嫁教鳥（とつぎおしえどり）や恋教鳥（こいおしえどり）という呼び名があります。

【日本神話で最初に登場する鳥】

他にも、セキレイのつがいは仲睦まじく一緒に行動することから相思鳥（そうしどり）とも呼ばれることがあります。

日本各地でセキレイにまつわる伝承がいくつもあり、神の鳥として称される地域もあります。伊勢神宮の神衣大和錦にはセキレイの模様があるといわれています。このようにして人々から大切にされてきたからか、セキレイは人間に対する警戒心がとても薄く、人間の生活するそばで暮らします。古くから人間にとって身近な鳥だったのですね。



！ 舎人図書館にある参考資料の一部を紹介 ↓

- ！ 上田恵介 『世界のかわいい小鳥』 パイインターナショナル
- ！ 三上修 『身近な鳥の生活図鑑』 筑摩書房
- ！ 大橋弘一 『鳥の名前』 東京書籍

毎月集めて、舎人地域学習センター・図書館のオリジナル図鑑をつくろう！



とねり自然図鑑

世界中にいる動物、昆虫や花などいろいろな自然の写真を「フォトクラブメビウス」の会員方にご協力いただき、毎月発行しております。写真にちなんだ「へえ～」という情報もお楽しみに。

【撮影した方のつぶやき】クチバシを大きく開き、小さな体でめいっぱいさえぎっているのが伝わる写真が撮れました。勇ましい姿でもありますが、少し寂しそうな感じもしました。（舎人公園にて撮影）。

【カツコウから我が子を守れ！】

○オオヨシキリ（大葦切）は漢字の通り、葦の茎を切り裂きエサの昆虫を捕えることが名前の由来といわれています。この葦の茎をたばねるようにして巣も作り、子育てを行います。しかし、このオオヨシキリの巣を狙う鳥がいます。それは、カツコウやホトトギスなどです。狙うといっても巣を壊すなどの攻撃を行うわけではありません。【托卵】といって自分が産んだ卵を他の種の鳥に育てさせます。例えば、カツコウがオオヨシキリの巣から卵をひとつ盗み出し、代わりに自分の卵を巣に置きます。その後、

オオヨシキリが卵を温め、卵からかえったカツコウのヒナは他のオオヨシキリの卵やヒナを巣の外に捨ててしまいい、食べ物を独占して育てていきます。しかし、オオヨシキリも【托卵】をされているばかりではありません。オオヨシキリはこっそり巣に置いたカツコウの卵をみやぶり巣の外に捨てます。カツコウがこのような繁殖方法をとる理由はまだよくわかっていませんが、オオヨシキリは自分の子を守るため、常に油断できないということです。

名称：オオヨシキリ（大葦切）
学名：Acrocephalus arundinaceus
体長：約18cm
分布：九州以北
場所：草原など
主食：昆虫、クモなど



舎人図書館にある参考資料の一部を紹介↓

上田恵介 柚木修 『小学館の図鑑NEO 鳥』 小学館

平野伸明 『野鳥記』 福音館書店

川上和人 『鳥（ポプラディア大図鑑WONDA）』 ポプラ社

毎月集めて、舎人地域学習センター・図書館のオリジナル図鑑をつくろう！